

令和7年（ワ）第36884号 損害賠償請求事件

原告 飯村 豊

被告 日本放送協会 外5名

原告意見陳述（案）

令和8年2月10日

東京地方裁判所 民事第32部 乙合議1B係 御中

原告訴訟代理人弁護士 梓澤 和幸

同 上 西岡 弘之

同 上 坂 仁根

原告が頭書事件第1回期日において行う予定の意見陳述の内容は、以下のとおりである。

記

私は本件訴訟の原告として、昨年8月15日及び16日に放映されたNHKほか被告4社及び被告石井裕也監督の制作によるNHKスペシャル番組「シミュレーション 昭和16年夏の敗戦」について、私の考えを述べさせていただきます。

この番組は、終戦80周年の機会に、日本が先の大戦へ向かった経緯を省み、同じ過ちを繰り返さないための教訓を学ぶことを目的として制作されたものと理解しております。しかし、その結果は史実を歪め、特定の実在人物すなわち私の祖父・飯村穰の名誉を、根拠なく毀損する内容となりました。私の代理人である梓澤和幸弁護士は、司法

記者クラブでの記者会見において、「歴史は真実を描いてこそ未来への力になる」と警告しております。

本日は、まず当時の時代背景に簡単に触れ、次に総力戦研究所とは何であったのか、そして、その設立・運営につき私の祖父が果たした役割、そして最後に祖父の人物像について、私の知る範囲で申し上げます。

まず、時代背景に触れたいと思います。当時、日本は中国への軍事介入を続けており、米英などとの関係は悪化の一途を辿っていました。1929年の世界恐慌以降、世界経済はブロック化が進み、国内では経済と内政の混乱があいまって、テロリズムの多発に見られるように極度に混迷していました。他方、欧州では大陸全般を巻き込む戦争が始まっており、その性格も、第一次大戦以前のように短期的軍事決戦で決着するものから、経済、社会、思想、資源など総合国力を巻き込む長期的な「総力戦」となる傾向を見せていました。

この新しい戦争の形を研究し、国家の指導層を教育する機関は、1920年代後半の英国防大学の設立に始まって、1930年代にはフランスやドイツにも広がっていました。トルコでの駐在武官勤務を終え、参謀本部で欧米問題を担当していた私の祖父や、欧州各国に駐在し、国際社会の動向を見ていた中堅将校らは、日本にも同様の研究所機関が必要であると提唱し、その結果、遅まきながら1940年に内閣総理大臣直属の「総力戦研究所」が設立されました。

研究所には、官僚、民間人、軍人などの中核を担う若手が毎年三十数名集められることとなりました。教育方法は、個別研究や共同作業と多岐に渡っていましたが、特に注目すべきは、それまで軍の学校などで行われるに止まっていた机上演習が、これを機会に官僚・民間人も参加するものになった点です。これにより日本の総合国力が英米との総力戦に耐え得るかを、分野横断的に検討する試みが行われました。

NHK番組の中心舞台となったのが、この総力戦研究所の机上演習です。NHK番組においては板倉大道という架空の人物が所長として描かれていますが、1941年の机上演習は、実在の所長である私の祖父・飯村穰の指導の下で行われています。したがって、

所長を架空の人物と置き換えたとして特定の性格付けを行い、フィクションと主張することは不可能です。

祖父は昭和9年にも参謀本部で演習を行っていましたが、それと同様、この演習は「日米戦うべからず」を警告せんとしたものと言われていました。この時代において、対米戦争の危険性を指摘する演習を行うことは、重大な個人的なリスクを伴うものであったとも思います。

祖父は明治天皇を深く敬い、軍人勅諭の「軍人ハ政治ニ干渉セズ政治ノ外ニ立チ」との言葉を、軍人としての人生の規範としていました。また、若い時からフランス語を学び、トルコ駐在時にはトルコ陸軍大学で日露戦史をフランス語で教えたことを誇りとしておりました。晩年まで、フランス語の外交、軍事文献に囲まれた毎日を送っておりました。言い換えれば、祖父は穏健な考えを持った武人であり、部下たちからも敬愛され、国際的な視野を有する軍人でした。

その祖父がNHK番組において、好戦的で卑劣な人物として描かれたこと、そして多くの史実が歪められていたことに、私は強い衝撃を受けました。

私はNHKに対し、歴史の真実を誠実に語る姿勢を求めます。理由なく人の名誉を傷つける行為は許されません。公共放送であるNHKには、その重大な責任を感じて頂きたいと思います。

しかるに、自らの過ちを反省しないどころか、昨年12月25日には、この虚偽に満ちた番組を基礎として映画化が行われるとの発表が行われました。私は深い悲しみと怒りを感じております。この裁判を通じて、NHKを始めとする被告らには、猛省を促したいと思います。

以上